

スタートラインに 立った諸君へ

学科長 中井 賢一

才不才は、生まれつきたることなれば、力に及びがたし。されど、大抵は、不才なる人といへども、怠らず努めだにすれば、それだけの功はあるものなり。また、晩学の人も、努め励めば、思ひの外、功を成すことあり。また、暇の無き人も、思ひの外、暇多き人よりも、功を成すものなり。されば、才の乏しきや、学ぶことの晩(おそ)きや、暇の無きやによりて、思ひくづをれて、止むることなかれ。とてもかくても、努めだにすれば、できるものと心得べし。(本居宣長『うひ山ふみ』より、一部、表記を改めた。)

大した才能もなく、三十歳を過ぎて研究を志し、公務員として働きながら論文を書き続け、今ここにいる学科長より。

表紙の写真について

熊本県立大学の松

県立大学の西門を入ってすぐ、図書館とグローバルセンターの間に数本の松の木があります。この地域が健軍飛行場だったところからある松で、グローバルセンターの建物を建てる際に伐採される見込みであったところを、教員有志が学長に趣意書を出すなどして守ったという逸話が残っています。グローバルセンターの建物を上から見たときに東南の隅が欠けているのは、そのためです。春から夏にかけての日差しが強い時期には、この木の陰でお弁当を食べる学生・教職員の姿も見られます。

ニチブン

「日文」で学ぶ4年間

主な専門科目とカリキュラムの流れ

学科の授業は、下級生向けには、基本的なもの、広い範囲を扱う「概論」や「基「演習」や「特殊研究」が多く配置されています。

「概論」や「基礎論」などで基本的な知識や方法論を身に付け、次に「演習」を積み、さらに「特殊研究」において教員の専門とする分野の細かい指導を受

入学

● 基礎的科目

基幹的分野	日本語学概論	近代文学史
	方言学基礎論	地域踏査演習
	文献学基礎論	日本語教授法
	古典文学史	古代文学講読
	文学研究法基礎	近代文学講読
関連分野	歴史基礎論	知識と方法
	言語基礎論	文学研究への招待

● 展開的科目

日本文法	地域文献講読
日本語史	古典文化研究
日本語学史	言語文化研究
中世文学講読	近代文化研究
近世文学講読	地域文化研究
現代日本語の分析	日本文化論
歴史学講義	情報学実習
中国文化論	人文学概論
中国文学史	比較文学講義
日中比較文学	心理学講義
異文化コミュニケーション論	など

5つの卒業履習分野

日本語もしくは、日本の文学作品の研究が基本となりますが、各自の関心や比重の置き方によって卒業論文の作成に当っては、5つの分野の中から自分にあったものを選んで論文を書きます。

日本語の特質、
歴史などを研究したい→**日本語学**

日本の文学作品、
その背景などを研究したい→**日本文学**

外国人に日本語を教えるための
技術を研究したい→**日本語教育学**

地域の言語や文学・歴史などを
重点的に研究したい→**地域文化**

中国文化、歴史学、
異文化コミュニケーションなど、
様々な隣接分野と
関連づけて研究したい→**人文学**

日本語日本文学科(通称^{ニチブン}日文)での入学から卒業までの道筋を紹介しましょう。

礎論)、上級生向けには、特殊な問題を深く掘り下げる
 において研究対象を深く掘り下げて考える実践的訓練
 けながら卒業論文を作成する、という手順です。

*注意

下記の図は科目の種別による大まかな見取り図を示したもので、各学年の配当年次には対応していません。正確なカリキュラム表は大学案内などを御参照ください。

卒業

● 演習

日本語学演習Ⅰ～Ⅲ 中近世文学演習
 日本語学演習Ⅳ～Ⅵ 近代文学演習
 日本語学演習Ⅶ～Ⅸ 日本語教育演習
 古代文学演習 日本文学演習

複合演習

歴史学演習 言語学演習
 中国文化論演習 比較文学演習
 心理学演習
 異文化コミュニケーション演習 など

● 特殊研究

日本語学特殊研究ⅠⅡ 中近世文学特殊研究
 日本語学特殊研究ⅢⅣ 近代文学特殊研究
 日本語学特殊研究ⅤⅥ 日本語教育特殊研究
 古代文学特殊研究

歴史学特殊研究 言語学特殊研究
 中国文化論特殊研究 比較文学特殊研究
 心理学特殊研究
 異文化コミュニケーション特殊研究 など

卒業論文



卒業論文発表会

多彩な「演習」

本学科の「目玉」とも言える演習。一つの文献を定め、その一言一句にこだわって精読したり、海外での日本語教育実習を通して実践的な技術を磨いたり。演習の主役は学生です。これまで開講された演習の一端を紹介しましょう。

日本語学・日本語教育

- 文法研究の手法
- 仏教説話集『沙石集』の語学的分析
- 現代日本語の音声と音韻分析
- フィールドワークによる言語調査
- 韓国・中国・米国・インドネシア等での実習

日本文学

- 『源氏物語』の表現分析
- 室町の百韻連歌を読む
- 芥川龍之介初期作品精読
- 二葉亭四迷『浮雲』から夏目漱石『こころ』へ

人文学

- 江戸時代に編纂された名将伝の読解
- 「長崎聖堂」関連古文書読解
- プラトン『国家』精読
- 中国志怪小説『夷堅志』読解
- 『日韓の言語文化の理解』講読

ゴールとしての「卒論」

学生のゴールは卒業論文(卒論)です。関心がある分野の「特殊研究」において教員の指導を受けつつ400字詰原稿用紙にして50枚前後(約2万字)の論文を執筆します。論文を書くとは、オリジナルの知見や分析を元に新たな学説を立てることです。完成まで、それまでに得た知識・調査手法・プレゼンテーション能力を総動員する厳しい日々が続きます。最近の卒論タイトルをいくつか紹介しましょう。

日本語学・日本語教育

- 徳富蘆花『不如帰』内連体助詞「が」の特殊性
- 近世における「フピン」の意味・用法について
- 熊本県菊池郡大津町方言における待遇表現
- 添加の接続詞「そして、それから」の用法について

日本文学

- 『源氏物語』の六条院崩壊と「冬の町」—明石の御方の異界性を契機として—
- 宮沢賢治「十力の金剛石」論
- 古代、中世における「人魂」観
- 花袋作品における自意識—『野の花』から『蒲団』まで—

人文学

- 唐以前の中国における桃の受容について
- 〈黒船〉言説の誕生
- 日韓の二字漢字語動詞に関する考察—「正の転移」と「負の転移」—

研究力を社会で磨く 社会に活かす



門司港レトロにて

●地域踏査演習

本(大)学のスローガンは「地域に生き、世界に伸びる」。その際の「地域」とは、多くの場合「熊本」を指しますが、「世界に伸びる」ためにも、諸君がまず活動の足場を置く——そのために知っておく必要のある「地域」はそこに留まりません。

本学科では主に一年生を対象に「地域踏査演習」という授業を設定していますが、そこでの「地域」は熊本を中心に九州近県までを対象としています。続く「踏査」の方ですが、「踏」は「ふむ」・「査」は「しらべる」、すなわち実際にその地に足を着けて(行って見て)調べることです。具体的には、まずその年の行き先に選ばれた地域と関連するいくつかのテーマについてグループ学習を行います。そこで自分たちで調べ・発表を行った事柄に関して、今度は一日バス旅行という形で実地調査を行うのです。後日そこで実際に見てきたことをレポートに纏めるまでが授業の一環です。旅行は原則一年生の夏休みに丸一日をかけて行われるため、学生同士、また学生と教員がより親しくなる機会でもあります。



高千穂峡にて



●読書感想文書き方指導

文学・語学を学び蓄えた知識を活かし、毎年度の夏休みに熊本県立八代中学校との連携で読書感想文の書き方指導教室を実施しています。

読書感想文を書くには、いくつかのポイントがあります。原稿用紙の使い方のルール、読んだ本から論点とすべきことの選別、書き出しとまとめの内容、あらすじの書き方や意見のまとめ方、文章表現上の留意点、段落構成、推敲の大切さなど。それらについて学生たちで事前の話し合いを行った上で、中学校に出向き、中学生一人ひとりに直接指導します。人によっては書くことそのものが苦痛な読書感想文です。満足のいく感想文の完成まで緊張感を持続してもらうにはどうすれば良いのか、という観点に立つことが大切になります。また、説明を試みる中で、普段は気づかない文章表現の難しさを改めて実感するなど、学生自身もさまざまなことを学ぶ重要な活動となっています。



机に向かって本を読むことだけが、大学の勉強ではありません。
地域との積極的ななかかわりの中で、「生きた知識」の構築を目指します。



天草ジオパークと「やさしい日本語」プロジェクト
(天草市立御所浦白亜紀資料館)



菊池市での和本調査

●地域委託研究 ——菊池市の和本調査など

日文科では地域連携活動を重視しており、多くの研究室が様々なフィールドに出かけています。ここではその一つ、平成24年度に歴史学研究室が着手した菊池市の和本調査を紹介します。

現場では埋もれた1,176冊の和漢籍を発掘し、まず学生とともに書誌(本の情報)を取りました。次に和紙の葉を用いて仮番号を各冊に付し、最後に中性紙でできた箱に収める、といった整理作業を行い、本の出納を可能にする体制を整えました。これらの書物は平成29年11月に開館した生涯学習センター内の古文書室に収められ、今後市民に提供される予定となっています。

なお、これまでの書誌採録の成果を『菊池市生涯学習センター蔵和漢籍分類目録』(平成30年3月)にまとめ、和漢籍の全貌を学問的に明らかにしました。また、この活動は社会的にも認められ、『熊本日日新聞』(平成26年1月5日、平成30年1月21日)に取り上げられました。

その他、日本文学研究室、日本語学研究室、日本語教育研究室も、水俣市、八代市、人吉市、天草市、熊本市などで活動しています。積極的な学生は学内の演習などで培った能力を生かしつつ2つ3つと活動を掛け持ちして、他では味わえないような学生生活を満喫しています。



水俣市での徳富蘇峰書簡の調査



演習における方言調査

ことのは を開く ― 本学科・教員による研究活動など

○「歴史文化シンポジウム 2018・平成の終末に語る明治と昭和」を開催

学科ホームページ (<https://www.pu-kumamoto.ac.jp/~nichibun/index.html>) から「地域連携」のページを御覧いただくとお分かりのように、2年に1回の頻度で、学科イベントにより研究成果の発信をしています。2018年度は元号の節目が話題となったのを契機に、文学の視点で明治から昭和を振り返る企画を計画しました。

成蹊大学名誉教授の揖斐高氏、静岡英和学院大学の古郡康人氏から基調講演をいただき、その後、本学客員教授平野有益氏、歌人の林あまり氏を迎えてのパネルディスカッションでは、それぞれの立場から明治維新以来の150年を振り返る、活発な討議となりました。

続く研究成果報告では、水俣市立蘇峰記念館での調査成果を学生有志が発表し、会場からも好評をいただきました。



登壇者左より 古郡康人氏、揖斐高氏、林あまり氏、平野有益氏、半藤英明学長



江戸時代初期の活字印刷に関する新資料を報告する学生発表者

○教員の近著紹介

「日文」教員の研究は深いだけではなく、意外にも相当に広いのです。近年刊行の著書には次のようなものがあります。これら以外の毎年の業績は、大学ホームページの「研究者情報」をご覧ください。

- ①大島明秀 [著] 『細川侯五代逸話集―幽齋・忠興・忠利・光尚・綱利―』 熊本日日新聞社 (2018) 肥後細川家初代当主幽齋から五代綱利治世までの逸話集「随聞録」全55話の現代語訳と原文(校訂版)。資料解題のほか、歴代当主と家臣の意外な行状の背景が読み解けるよう各話に解説を付した。
- ②中井賢一 [著] 『物語展開と人物造型の論理―源氏物語〈二層〉構造論―』 新典社 (2017) 『源氏物語』の展開や人物造型は、いかなる仕組みによって制御されているのか。古来の種々問題系の解明に向けて、物語構造論の観点から、その論理について考証する。
- ③小川晋史 [編著] 『琉球のことばの書き方―琉球諸語統一的表記法―』 くろしお出版 (2015) 北は奄美から南は八重山まで、汎用的な表記法の定まっていない琉球諸語について、複数研究者の協力により新たな表記法の提案を行うとともに、個別方言の表記例を示す。
- ④鈴木元 [著] 『室町連環―中世日本の「知」と空間―』 勉誠出版 (2014) 和歌・連歌・お伽草子等々、多様なジャンルの作品が華開いた室町の世。時代の中を生きた文藝の姿を、宗教、学問の背景と併せ解き明かす。
- ⑤半藤英明 [著] 『日本語基幹構文の研究』 新典社 (2018) 係助詞「は」「も」「こそ」による文を日本語の基幹的構文と位置づけ、主述関係など、さまざまな事象に文法的な説明を施す。
- ⑥山田俊 [著] 『宋代道家思想史研究』 汲古書院 (2012) 朱子学の祖である朱熹の出現前後における老荘(老子・莊子)思想受容の展開を、各時代に主要な論点であった「無為」と「有為」、「本然」と「氣質」等を切り口に分析する。

